長野・須坂市でゲストハウス　外国人の心つかむ

起業@信州

2017/12/11 23:00|日本経済新聞　電子版

長野電鉄須坂駅から歩いて約15分の場所に、外国人が多く訪れる古民家がある。元日本語教師の山上万里奈氏が始めた「ゲストハウス蔵」（須坂市）だ。宿泊場所の提供にとどまらず、利用者への日本語のレッスンや、ワーキングホリデーの働き先を紹介するといった取り組みで外国人長期旅行者の心をつかんでいる。定期的に交流イベントを開催するなど、地域おこしにも一役買っている。

「日本をもっと知ってほしい」と話す山上氏

山上氏は須坂市の出身。中国や首都圏などで日本語教師を経験した後、岐阜県高山市の旅館に勤めた。外国人にも人気の高い旅館で働くうちに「日本が好きな人たちに日本をもっと知ってほしい」と考え、自ら宿を経営することを志した。

開設時に意識したのは須坂らしさと外国人に喜んでもらえる日本らしさだ。ゲストハウスはかつての地場産業である製糸業を営んでいた築130年の古民家を賃借。家具もきれいにした上でそのまま使っている。開業資金は須坂市が空き家活用のために拠出している補助金を使った。

ゲストハウスは２段ベッドを使うのが一般的だが、「蔵」は畳で寝るスタイルだ。「ドミトリーを泊まり歩くバックパッカーは『オー！畳で寝るのは初めてだ』と言って喜ぶ」（山上氏）。日本語教師の経験を生かして、ゲストハウスのラウンジで宿泊者に別料金で日本語を教えるサービスもしている。インターネット予約が中心で、口コミなどで人気が広がった。

ここ数年の外国人観光客の増加とともに、周辺地域のゲストハウスの数も増えた。開業当初は「スノーモンキー」で外国人にも有名な地獄谷野猿公苑（山ノ内町）に最も近いゲストハウスとして売り込めたが、現在はさらに近い場所でゲストハウスが開業している。「継続することの大変さを感じている」という。

差別化を意識して今年から本格的に始めたのがワーキングホリデー支援プランだ。日本語の勉強に加えて、地元のブドウ農家などを仕事の受け入れ先として紹介し始めた。「ワーホリで来日する人が困るのは宿、言語、仕事先。紹介事業を始めることで、３つ同時に提供できるようになった」と山上氏は語る。

須坂市周辺の６～７軒の農家と提携し、繁忙期を中心にワーホリ希望者を紹介する。これまでに台湾人など計４人を紹介した。来年は受け入れ時期の拡大のために繁忙期がブドウと違うリンゴ農家などにもネットワークを広げたいという。

外国の食べ物を地元の人と外国人で楽しむ交流イベントも年に数回に開く。山上氏は「須坂は観光地ではないが、外国人にも居心地の良い町にしたい」と力を込める。（北川開）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.